



大阪湾初記録のベニカワムキ

木村祐貴¹・松久太一²

Author & Article Info

¹ 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所水産技術センター(岬町)
KimuraY@o-suishi.in.arena.ne.jp (corresponding author)² 泉佐野漁業協同組合(泉佐野市)

Received 24 July 2026
Revised 04 August 2026
Accepted 05 August 2026
Published 06 August 2026
DOI 10.34583/ichthy.70.0_7

Yuki Kimura and Taichi Matsuhisa. 2026. First record of *Triacanthodes anomalus* (Triacanthodidae) from Osaka Bay, Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 70: 7–9.

Abstract

A single specimen of *Triacanthodes anomalus* (Temminck and Schlegel, 1850) was collected from Osaka Bay, Japan, in 2026. In Japanese waters, this species has previously been recorded from the Pacific coast from Miyagi Prefecture to the southern coast of Kyushu, the coast of the Japan Sea from Niigata Prefecture to Nagasaki Prefecture, the coast of East China Sea of Kagoshima Prefecture, Hyuga-nada, Kagoshima Bay and the Seto Inland Sea. Thus, the present specimen, described here in detail, represents the first record of *T. anomalus* from Osaka Bay.

ベニカワムキ科 Triacanthodidae ベニカワムキ属 *Triacanthodes* Bleeker, 1857 は、日本国内からベニカワムキ *Triacanthodes anomalus* (Temminck and Schlegel, 1850) およびシマベニカワムキ *T. ethiops* Alcock, 1894 の2種が知られ(林・荻原, 2013), このうちベニカワムキは、宮城県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、新潟県から長崎県の日本海沿岸、鹿児島県の東シナ海沿岸、日向灘、鹿児島湾、瀬戸内海(安芸灘)から報告されている(南西海区水産研究所, 1987; 林・荻原, 2013; 岩坪, 2017, 2022; 山崎, 2021; 手良村ほか, 2024).

2026年5月6日に大阪湾で操業していた小型底曳網漁船によってベニカワムキ1個体が採集された。本標本は本種の大阪湾初記録および標本に基づく瀬戸内海からの確かな記録となるため、ここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は渋谷ほか(2021)にしたがった。標本の作製と登録は本村(2009)にしたがった。体各部の計測はデジタルノギスを用いて0.1 mmの精度で行った。標準体長(standard length)は体長またはSLと表記した。色彩は、固定前に撮影された標本のカラー写真に基づくが、本標本は冷凍保存された後、解凍し標本写真を撮影したため生鮮時とは若干色彩が異なる。このため、冷凍前に第2著者によって撮影された写真を生鮮時の体色とし、標本のカラー写真は冷凍後の体色と表記した。本報告で使用した標本は大阪市立自然史博物館(OMNH-P)に登録、保管されている。

Triacanthodes anomalus (Temminck and Schlegel, 1850)

ベニカワムキ

(Figs. 1, 2)

標本 OMNH-P 56105, 体長31.2 mm, 兵庫県神戸市沖, 水深35 m, 小型底曳網(石げた網), 2026年5月6日, 松久太一。

記載 背鰭鰭条数 VI, 15; 臀鰭鰭条数 14; 胸鰭鰭条数 14; 腹鰭鰭条数 I, 2. 標準体長に対する各部位の百分率(% SL): 頭長 45.1; 吻長 18.9; 眼窩径 19.3; 眼窩後長 11.9; 両眼間隔 11.7; 鰓孔長 20.5; 体高 60.4; 体幅 20.3; 背鰭前長 51.6; 背鰭第1棘長 32.2; 背鰭第2棘長 24.3; 背鰭軟条部基底長 22.8; 背鰭最長軟条長 15.8; 臀鰭基底長 17.3; 臀鰭最長軟条長 15.8; 尾柄長 16.0; 尾柄高 12.4; 尾鰭長 30.9; 腹鰭棘長 33.5; 背鰭前長 52.3; 臀鰭前長 77.3; 頭長 34.8; 眼径 12.1; 両眼間隔 11.8; 吻長 8.9; 腹鰭棘長 22.9; 腹鰭第1軟条長 9.5; 腹鰭間隔 16.5; 胸鰭長 17.4.

体は著しく側扁する。体背縁は吻端から眼窩前端にかけて緩やかに上昇した後、眼窩に沿うように膨らみ、背鰭第1棘にかけて上昇する。その後、直線的に降下し、背鰭軟条始部から尾柄部にかけては弧状に降下する。体腹縁は下顎から骨盤後端まで緩やかに下降し、尾柄部にかけて著



Fig. 1. Fresh specimen of *Triacanthodes anomalus* (OMNH-P 56105, 31.2 mm SL) from Osaka Bay, Japan.



Fig. 2. Photograph of *Triacanthodes anomalus* (OMNH-P 56105, 31.2 mm SL) from Osaka Bay, Japan, immediately after landing.

しく上昇する。背鰭棘は6棘からなり、前方の4棘は比較的明瞭に発達するが、後方の2棘は極めて短く、第6棘は体表からわずかに突出する程度。背鰭棘および腹鰭棘の前縁は鋸歯状突起があり、後縁は円滑。背鰭棘部始部は腹鰭棘部始部の直上に位置する。背鰭軟条部基底後端は臀鰭軟条部基底後端の直上に位置する。胸鰭基底部は背鰭第2棘基部直下に位置する。腹鰭棘は長い。腹鰭軟条は極めて短

く、腹鰭第2軟条は体表からわずかに突出する程度。尾鰭は円形。口は小さく端位。吻は突出する。眼は円形。鼻孔は2対。前鼻孔、後鼻孔は近接し、眼の前方に位置する。歯は円錐状。両顎前部の歯列は2列で内列歯は2本。鰓孔は小さく、鰓孔下端は胸鰭基底中央の前方に位置する。体の表面は小突起を有する鱗で一様に覆われる。

色彩 冷凍後の体色 (Fig. 1) — 体の背側は淡い赤色。腹側前方は白色で、臀鰭基底部から尾柄部にかけてはわずかに赤みがかかった白色。体側にやや黒みがかかった赤色の縦線が2本走る。背側から1本目の縦線は吻部から背鰭第1棘を結ぶ背縁の中央部から背鰭軟条部後端まで縦走する。2本目は眼窩後端から肛門まで縦走する。2本目と同じ眼窩後端を始点として胸鰭基底部にかけて赤色の短い縦線が走る。背鰭鰭条の地色は白色で、第1棘上方と第2-4棘、および第1-4軟条は赤みがかかる。背鰭鰭膜は無色透明。尾鰭鰭条の地色は白色で、後方はわずかに赤みがかかる。尾鰭鰭膜は無色透明。胸鰭、腹鰭および臀鰭の鰭条は白色で、鰭膜は無色透明。吻部は赤色。虹彩は地色が暗褐色でその内縁はわずかに黄色みがかかる。

生鮮時の体色 (Fig. 2) — 冷凍後の体色とは以下の点で

異なる：体側に走る2本の縦線は黄色みがかかる。吻から眼窩下方にかけては淡い黄色。虹彩は地色が黄色でその外縁は赤みがかり、虹彩下方は褐色。

分布 本種は日本のほか韓国、台湾、中国浙江省・広東省沿岸、海南島、マレーシアの東シナ海大陸棚域に分布している（林・荻原, 2013; Matsuura, 2015）。日本国内においては、宮城県から九州南岸にかけての太平洋沿岸、新潟県から長崎県の日本海沿岸、鹿児島県の東シナ海沿岸、日向灘、鹿児島湾、瀬戸内海（安芸灘）から報告されている（南西海区水産研究所, 1987; 林・荻原, 2013; 岩坪, 2017, 2022; 山崎, 2021; 手良村ほか, 2024）。本研究により、新たに大阪湾から記録された。

備考 記載標本は、吻が管状に延長せず、吻長と眼径がほぼ同じこと、歯が円錐状であること、両顎歯は2列であること、生鮮時の体側に黄色味がかかった暗色縦線が2本あること、両眼間隔域が丸く膨張すること等の特徴が林・荻原（2013）の示した *Triacanthodes anomalus* の特徴と一致したため、本種に同定された。なお、標徴の一つである鼻孔中の皮弁数は、解剖して観察を試みたが、小型個体であること、保存状態も良好でなかったことから計数できなかった。

大阪湾での中型2そう曳網調査（南西海区水産研究所, 1987）、大阪湾を中心として瀬戸内海で採集された魚類の標本目録（波戸岡・花崎, 2017）および大阪湾で実施された小型底曳網調査（木村, 2022）でも本種は確認されておらず、本標本が本種の大阪湾からの初めての記録である。また、南西海区水産研究所（1987）は1960年2月に安芸灘で実施した中型2そう曳網の試験操業による採集物リストの中でベニカワムキ1個体を報告しており、これまでの瀬戸内海で唯一の記録となっていた。ただし、当該標本の所在は示されていないことから、本研究は初の標本に基づく瀬戸内海からの確かな記録となる。

本種を含むベニカワムキ科魚類は通常、大陸棚および大陸斜面の水深100–600 mに生息している（Tyler, 1968; Matsuura, 2015）。本種の主生息水深は90–150 mとされているが（林・荻原, 2013）、大阪湾は水深100 mに達する場所があるものの、平均水深は約28 mとかなり浅い海域である（生態系工学研究会, 2009）。これまでに大阪湾での出現記録がないことや本標本の採集地点周辺の水深（35 m）が本種の主生息水深よりもかなり浅いことを考慮すると、本標本は太平洋側あるいは大阪湾の深部から来遊した、

もしくは卵、仔稚魚期に湾内へ偶発的に加入したものと考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、泉佐野漁業協同組合の道正和貴氏には標本の採集にご尽力を賜った。大阪市立自然史博物館の松井彰子氏には標本収蔵に際して便宜を図っていただいた。宮崎大学の緒方悠輝也氏と大阪公立大学の小林優也氏には文献収集にご尽力を賜った。Ichthy 編集委員の宮本圭氏には改訂に際して有益な助言を賜った。ここに感謝の意を表する。

引用文献

- 波戸岡清峰・花崎勝司. 2017. 瀬戸内海産魚類標本目録. 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 48: 1–204.
- 林 公義・荻原清司. 2013. ベニカワムキ科, pp. 1699–1701, 2234. 中坊徹次（編）日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 岩坪洗樹. 2017. ベニカワムキ科, pp. 296. 岩坪洗樹・本村浩之（編）火山を望む甕海 鹿児島湾の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 岩坪洗樹. 2022. ベニカワムキ科, pp. 274. 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之（編）薩摩半島沿岸の魚類. 鹿児島水圏生物博物館, 鹿児島・鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島.
- 木村祐貴・鍋島靖信・大美博昭・佐野雅基. 2022. 1990年代および2010年代に大阪湾底びき網モニタリング調査で採集された魚類. 地域自然史と保全, 44: 61–70.
- Matsuura, K. 2015. Taxonomy and systematics of tetraodontiform fishes: a review focusing primarily on progress in the period from 1980 to 2014. Ichthyological Research, 62: 72–113.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- 南西海区水産研究所. 1987. 瀬戸内海と周辺域における漁獲物の種組成 昭和32–35年 中型2そうびき網による試験操業. 南西海区水産研究所調査報告, 4: 1–154.
- 生態系工学研究会. 2009. 大阪湾—環境の変遷と創造. 恒星社厚生閣, 東京. 137 pp.
- 渋谷駿太・伊東正英・本村浩之. 2021. 薩摩半島南西沖から得られたソコカワムキ（フグ目ベニカワムキ科）：国内における土佐湾以外からの初記録. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 5: 20–23.
- 手良村知功・加藤柊也・松下亮介・和田英敏. 2024. 底曳網漁業で得られた北限記録10種を含む宮城県初記録16種の魚類. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 49: 1–9.
- Tyler, J. C. 1968. A monograph on plectognath fishes of the superfamily Triacanthoidea. Monographs of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 16: 1–364.
- 山崎裕太. 2021. ベニカワムキ科, pp. 304–305. 村瀬敦宣・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏（編）新・門川の魚図鑑：ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡.